『純粋理性批判』における「力学的アンチノミー」

河　村　克　俊

はじめに

『純粋理性批判』の「力学的アンチノミー」（KrV B 557f./ A 529f.）の枠内で主題化される「自由」ならびに「必然的存在者」をめぐる問題には、当時の講壇哲学で事象連鎖の原因へ向けての無限背進の問題として論じられていたテーマが、その根底に認められる。「力学的」と形容される第三、第四アンチノミーの解決は、同時にこの無限背進の問題をカントが独自の観点から解決する試みとして解釈することができる。以下では先ず、第三アンチノミーの主題である自由と因果法則の矛盾について考察する。次にこの矛盾を解決する観点を提供する「超越論的観念論」の内容を確認し、最後にこの観点からなされる無限背進の問題の解決についてみることにする。

Ⅰ.1.「二律背反」論での自由概念

ヴォルフ、バウムガルテン、マイアーといった先行哲学者の形而上学書では自由概念が「心理学」で主題化されていたのに対し、カントは『純粋理性批判』でヴォルフ学派の形而上学書では「宇宙（世界）論」にあたる「純粋理性の二律背反」でこの概念を主題化している。ここで自由概念は、世界の進行のうちにあってそれ自身に先行する状態をもたない特殊な第一原因性として考察される。

18世紀の20年代から50年代にかけてドイツ講壇哲学界で影響力のあったヴォルフならびにその学派の哲学者たちは、理性に基づく選択意志の働きのうちに自由を認め、この自由を経験的に確かめうる概念とみなしていた。この学派から独立する J. G. H. フェーダーは、選択意志の自由を私たちがもつことを認めたうえで、この自由がどのような意味で始源的でありうるのかという問いを立てる[1)]。ここで問題となるのは選択や決定の始源性であり、

1）フェーダーはまず経験的に確かめうる自由を次のように説明する。「なるほど［…］人間の心にはまったくの独立や自由は決して認めることができない。しかし人間の心は適意に従って、ないし随意に、自らの力を用いる特別の能力をもち、それが選択意志と名付けられる」（LuM § 7, S. 27f.）。「もし理性的な表象に即して自らを決定する選択意志が自由と名付けられるのであれば、このような特性は人間の心のうちに容易に認識することができる」（LuM §7, S. 28）。そのうえで、これとは異なる哲学的反省を要する自由概念について以下のように述べている。「政治的、道徳的、そして一般的心理学的自由［…］は、形而上学のうちではいかなる論争も起こさない。しかし行為、欲求、表象また思惟実体の諸力のあらゆる外化といったものの根本原因について

先行的な状態や決定因からの独立性である。理性に基づく選択意志の働きのうちに経験的に把握することのできる自由を認めつつ、この働きの始源性、すなわち先行状態からの独立性を問うフェーダーの問題意識を、カントは共有していた。「第三アンチノミー」では、働きの始源性、先行状態からの独立性に関わる自由概念が、「定立」の側で次のように説明されている。

「自然の法則に従う原因性は、そこから世界の諸現象がすべて導出されるような唯一の原因性ではない。現象を説明するためにはさらに自由による原因性を想定することが必要である」(KrV B 472/ A 444)。

「自由による原因性」は、自然法測に従うのではなく、また先行する状態に続いて生じるのでもなく、第一原因性として考えられるものに他ならない。ここでの記述によれば「自由による原因性」は、世界の諸現象を導き出すための「自然法則に従う原因性」を前提に、この原因性だけでは汲み尽くすことのできない事柄について理解するために、いわば付加的に必要とされるものである。自然法則の支配する世界では、どの出来事も先行する状態をもち、その状態に続いて生じている。換言すれば、先行状態とまったく無関係の状態というものはあり得ず、すべての状態は先行状態と連鎖関係にあり、前者は後者を制約しており、後者は前者に依存している。

「定立」に示された「自由による原因性」はまた、ライプニッツやヴォルフ以降のドイツ哲学者の自由概念のもとに繰り返し見られた「自発性」というタームを用いて、「自然の諸法則に従って進行する諸現象の系列を自己自身から始める諸原因の絶対的自発性」(KrV B 474/ A 446) と表現され、「超越論的自由」(ibid.) と名付けられている。「自発性」という用語はドイツ講壇哲学から継承されたものであるが、しかしここでの「自発性」は先行する一切の決定根拠を否定するものであり、先行哲学者の自発性概念とは異なる。そして、この自由概念が「反定立」[2] の側から「因果法則」に反すると批判される。

「世界の出来事がそれに従って結果として生じる、ある特殊な種類の原因性としての、超越論的な意味での自由があると、すなわちある状態を、つまり、またこの状態の帰結す

熟考することは、私たちを上記のものとは区別して形而上学的自由と名付けうるある別の自由概念へと誘う」(LuM § 51, S. 326f.)。「この［形而上学的自由という］概念によって思惟実体は以下のような場合に自由であると言われる。すなわち思惟実体が根本規定によるのでも、外的な原因によるのでもなく、まったく次のように規定される場合に、つまり外部から来る諸規定のもとで様々な仕方で行為するのではなく、［行為せずに、行為に関して］可能的である続け、そしてそれゆえこの思惟実体が自らを自身の自己活動性によってある行為へと始源的に決定するような作用能力を持つ場合に、である。また簡略に表現すれば、ここで自由とは、自らの行為に際して自己自身を決定する能力である」(LuM § 51, S. 327)。この問いから、新たな自由概念の可能性の探究がはじまることになる。カントはこの問いを共有しており、この問いに答えることを一つの重要な課題とみなしつつ、独自の世界観を構築することになったと考えられる。

2) 「自由というものはなく、世界内のすべては自然の法則に従って生じる」(KrV B 473/ A 445)。

る系列を端的に始める能力があると、仮定してみよう。そうするとこの自発性によって一つの系列が始まるだけでなく、系列を産み出すための自発性自身の規定、つまり原因性もまた、端的に始まるだろう。従って、この生起する作用がそれによって恒常的な法則に従って規定されるいかなるものも先行しないのである。しかし作用の起始はつねにまだ作用していない原因の状態を前提している。そして作用の力学的な第一の起始は、この同じ原因の先行状態といかなる因果的連関ももたない状態を、つまりそれよりも前にある状態から生じたのではない状態を前提する。それゆえ超越論的自由は因果法則に反する」(KrV B 473/ A 445)。

ここでの記述に従えば、「原因性」は系列を産み出す「自発性」の働きを「規定」するものである。そして「自発性」はそれ自身だけで系列を産み出すことができず、必ず何らかの規定を必要とする。ここで「自発性」を規定する原因性とは、「自発性」の働きを方向付けるものであり、先行哲学者のもとで「知性」(ライプニッツ Theod. III. § 288)、「根拠」(ヴォルフ DM § 518) ないし「内的原理」(ヴォルフ PE § 933)、「行為者に内在する充足原理」(バウムガルテン BM § 704) とみなされた概念に相当する。「自発性」は常に何らかの原理ないし根拠と結びついており、これに基づいて働く。ここでの「根拠」ないし「内的原理」をカントは「自発性自身の規定」すなわち「自発性」を規定する何らかの規則ないし法則と理解する。この規則ないし法則は、それが自然法則と異なるがゆえにそれに従うことが自然法測からの独立とみなされうるような法則である。そして、この法則にあたるものがここでは「原因性」のうちに読み込まれているわけである[3)]。

また「反定立」によれば、すべての作用はそれが始まるに先立つ「原因の状態」をもち、この状態に続いて生じる。換言すれば、どの作用も自らに先行する状態をもち、この状態から継起することではじめて生起することになり、先行状態を一切もたない生起ということはありえない。これに対して、ここで仮定された「作用の力学的第一の起始」は、それが「第一の起始」である限り、自らに先行するいかなる状態ももたないはずである。すなわちここでの記述に従えば、この「第一の起始」はそれ自身の「原因の状態」を前提するが、しかしこの「原因の状態」は、さらにこれに先行する状態との因果関係にはなく、いかなるものに続いて起こるのでもない。換言すれば、「第一の起始」はその原因の

3) ここで自発性を規定するものとして原因性のうちに読み込まれているのは、後に「自由の客観的法則」(KrV B 830/ A 802)、「実践的法則」(ibid.) と名付けられる法則である。「絶対的自発性」はそれ自身無制約的な自己活動性であるが、しかし同時にそれが「自発性」である限り、これを規定する内的根拠ないし内的原理をもつと考えられる。この内的根拠がここでは、自然法則とは異なる法則である「実践的法則」等と読み換えられているわけである。「絶対的自発性」と換言される「超越論的自由」は、一切の先行的決定根拠から独立する自己活動性であり、それは第一原因性を意味する自由に他ならない。そしてこの「絶対的自発性」の活動のうちに自然法則と異なる内的根拠を読み込み、これを「実践的法則」とみなすところに、「超越論的自由」を前提とするもう一つの自由概念である実践的自由が成立する。

状態とともに、それに先行するいかなる状態も認めない。つまり先行するいかなる状態からの帰結でもないことが、「第一の起始」とその原因の状態のもつ特殊な性質であり、それが「因果法則」と矛盾をきたすことになる。では、ここでカントの述べる「因果法則」とはどのような法則であるのか。この法則は『純粋理性批判』の前半部に位置する「分析論」、就中「経験の類推」で主題化されている。ここで簡潔にその内容を確認しておきたい。

Ⅰ.2.「経験の類推」での因果法則

同書の「分析論」では、経験の可能性を制約する諸々の条件が論じられており、その脈絡で「関係のカテゴリー」に関わる原理が「経験の類推」[4] という表題のもとに主題化されている。カントによれば私たちの経験は、それが成立するにあたって前提となる諸々の条件をもち、そのもとではじめて産み出されるものであって、それらの条件が満たされることなしには決して成立しない。その条件とは、認識主観の側では感性、構想力、悟性の働きである。また客観の側では、認識主観が働く以前に既に在ったはずのもの、この主観との関係性が生じる以前に既に存在したはずのものである。この客観は、それが主観の活動との関係性のうちに生じるものではなく、この関係性の成立に先立つ位置に、したがって主観の活動から独立するものとして想定される限り、それ自身としては認識の対象とならない。カントは認識の成立する場面で想定されるこのような客観について、「非経験的－超越論的な対象＝X」（KrV A 108）と名付けている。認識主観の働きについては、「直観における覚知の総合」（KrV A 98）、「構想における再生産の総合」（KrV A 100）、「概念における再認の総合」（KrV A 103）という基本的な枠組みが第一版で提示されている。三重の総合と呼ばれるこの総合を要約すれば、感性的直観の次元、すなわち空間と時間のうちに客観に関する最初の総合が行われ、次に構想における「再生産」の総合が行われる。「再生産」とは、構想力が常に繰り返し表象を産み出すことで表象の持続性を維持することである。そして最後に悟性が概念によって客観の表象を「再認」することで、経験が産み出される。

「経験の類推」では、経験の可能性の条件を成す「関係のカテゴリー」に関わる分析が行われ、この「類推」の「原理」が次のように示される。「経験は、ただ諸々の知覚の必然的な結合の表象によってのみ可能である」（KrV B 218）。この原理によれば、諸々の知覚の必然的結合が経験を産み出す[5]。これは何を意味するのか。「知覚」は一般に感官に

4）ここでの「類推 Analogie」には、原因がその結果に対応するように、未知の事象 A が既知の事象 B に対応する、という含意がある。以下を参照。Artikel „Analogie. 2 Analogie der Erfahrung“ in: M. Willaschek u.a., hrsg., *Kant-Lexikon, Studienausgabe*, Berlin 2017, S. 11.

5）この原理については次のように説明されている。「経験とは経験的認識である。つまり諸知覚を通じて客観を規定する認識である。それゆえ経験は諸知覚の総合である。この総合自身は知覚のうちには含まれておらず、意識のうちでの知覚の多様の総合統一がこれを含んでいる。この総合統一は感官による客観の認識にとって本

よってもたらされるものであり、そのあり方は、「持続」（KrV B 219/ A 177）、「継起」（ibid.）、または他の知覚との「同時存在」（ibid.）である。複数の知覚を「結合」するのは感官ではなく直観でもなく、カントによれば構想力である。構想力は様々な知覚を、自らの働きによって「結合」することができる。この能力はまた、直観のうちにないものを表象することもできる[6]。そしてこの「結合」に必然性をもたらすのは、特殊な「悟性概念」である[7]。カントによれば、経験とは諸現象についての経験的な認識であり、現象はまったくの無から生成することはなく[8]、どの現象も常に先行する別の現象を前提とする。以上が「経験の類推」の要旨である。

「継起」を扱う経験の「第二類推」は、「原因性の法則に従う時間継起の原則」と名付けられ、次のように表現されている。「あらゆる変化は原因と結果の結合の法則によって生じる」（KrV B 232）。ここでの「変化」は事象生起のあらゆる形態を含む広範な意味で用いられており、私たちが経験しうるあらゆる種類の事象生起を包摂している。この「原則」は次のように「証明」（ibid.）される。

「私は諸現象が相ついで継起することを知覚する。つまりあるものの状態がある時間に存在し、それに先行する状態にはその反対の状態が存在したことを知覚する。すなわち本来的に時間のうちにある二つの知覚を結合する。さて、結合は単なる感官ないし直観の仕事ではなく、内的感官を時間関係に関して規定する構想力という総合的能力の産み出すものである。構想力はしかしここで考えられた二つの状態を二通りの仕方で結合することができるので、一方が他方に対して時間のうちで先行するか、または他方がもう一方に時間のうちで先行するか、何れかである。というのも時間はそれ自身としては知覚されず、時間に関していわば経験的に、何が先行し何が後続するのかということを、客観のもとで規定することはできないからである。それゆえ私が意識するのは、私の想像力[9] が一方のものを前に、他方のものを後に置くということだけであり、客観のうちで一方の状態が他方の状態に先行するということではない。また換言すれば、単なる知覚によるだけでは相互に継起する諸現象の客観的関係は規定されないままである」（KrV B 233f.）。

以上が三重の総合でみた三つの段階のうち最初の二つについての説明である。ここでは先ず、第一の段階として、諸現象の継起について、それらが知覚されることが描写され

質的なもの、すなわち経験にとって本質的なもの（ただ単に感官の直観ないしは感覚の本質的なものではなく）を成している」（KrV B 218f.）。

6）「構想力は、現象のうちに現在しない対象をもまた表象する能力である」（KrV B 151）。

7）知覚の結合が「必然的」であることは、この結合が純粋悟性概念に基づくことを意味する。以下を参照。「総合統一の必然性をもちあわす概念は、ただ純粋悟性概念だけである」（KrV B 234/ A 189）。この点については本文で改めて考察する。

8）「無からは何も生じない」（KrV B 228/ A 185）。

9）原語は „Imagination“。

る。諸現象の継起はここで二つの知覚の間に生じるとされ、二つの知覚の「継起」ということで、もののある状態が別の状態と交代すること、換言すれば相互に異なる二つの状態が知覚されるということが意味されている。ここでの二つの知覚はしかしまだ「結合」されていない。ただ互いに異なる状態として直観されているに止まる。二つの知覚を「結合」するのは構想力である。構想力は、二つの状態のうちどちらを前に置くことも後に置くこともできる。つまりどちらを前に置いて両者を結合することも可能である。換言すれば、構想力による知覚相互の状態の「結合」の段階では、どちらの状態が先でありどちらが後であるのかは定まっていない。前後関係の決定について何が必要とされるのかについては、以上の引用文に直接続く次の箇所で述べられている。

「さて、この関係が規定されたものとして認識されるためには、この二つの状態の間の関係が次のように考えられねばならない。すなわちそれら状態のうちのどちらが先に、どちらが後に置かれねばならないのか、またその反対に置かれてはいけないのかということが、この関係によって必然的に規定されると、考えられねばならない。しかし総合的統一の必然性を備えている概念は、純粋悟性概念だけである。そしてこの概念は知覚のうちにはない。またここでの純粋悟性概念は原因と結果の関係の概念である。原因は結果を時間のうちで帰結として規定し、またただ構想のうちでだけ先行しうるものとして（ないしはどこにも知覚されていないものとして）規定するのではない。それゆえ私たちが諸現象の継起を、つまりすべの変化を、因果性の法則のもとに服従させることによってのみ、経験ですら、つまり諸現象についての経験的認識ですら、可能となる。すなわち経験の対象である現象自身も、ただこの法則に従ってのみ可能となる」（KrV B 234）。

もう一度確認するならば、構想力は一つの状態を別の状態とただ結びつけるに止まり、その限り二つの状態はどちらが先行しどちらが後続するか、定まっていない。二つの状態の前後関係を定めることができるのは、経験そのものの成立に先立つ位置から、経験の可能性を制約する特殊な悟性概念だけである。そして、ここでこの役割を担うのが「原因と結果」（KrV B 106/ A 80）という純粋悟性概念である。構想力による二つの知覚の結合について、その前後関係に必然性を与えるのはこの「原因と結果」であり、この二つの状態の前後関係の必然化を通じてはじめて経験の対象となる「変化」が生成する。諸々の変化から成る「経験」もまた、このプロセスを前提として成立する。換言すれば、「諸現象についての経験的認識」は、このような過程を経ることではじめて産み出されるものに他ならない。

「原因と結果」を含む純粋悟性概念は、経験そのものが可能となるためにはどのようなものがその条件として必要であるのかという反省的な思考を通じて導き出された概念である。換言すれば、経験に先立ち経験そのものの可能性を制約するものは何であるのか、と

いう問いに対する答えとして導出された概念に他ならない。そして「原因と結果」は、経験そのものに先立つ位置から経験の可能性を制約する主要な悟性概念である[10)]。以上を纏めるならば、「原因と結果」という概念は、それが感官と構想力がもたらす所与に適用されることで、諸現象の状態の継起に必然的な前後関係を定める特殊な悟性概念である。このような概念は経験への反省からだけでは得ることができず、経験そのものの成立する条件を省察する観点からはじめて得られる、それ自身経験から独立する概念である[11)]。そして、諸現象の状態相互の間に必然的な継起の前後関係が規定されることではじめて経験が成立する。「あらゆる変化は原因と結果の結合の法則によって生じる」（KrV B 232）という原則は、経験に先立ち経験そのものの可能性を制約する原則である。

Ⅰ.3.「反定立」の立場

以上にみた「経験の類推」での論旨によれば、経験は、経験そのものの可能性を制約する諸条件を前提にはじめて成立する。この条件を成す「原則」の一つによれば、あらゆる事象生起は「原因と結果の結合の法則」によって生じ、どの原因もがそれ自身結果でもあり、自らに先行する原因をもたない端的な第一原因は、経験のうちには生じることがなく、その可能性は否定される。先の引用文によれば、「原因は結果を時間のうちで規定し…（どこにも知覚されていないものとして）規定するのではない」（KrV B 234）。そして「どこにも知覚されていない」原因が、特殊な原因として「結果」を規定することについては否定されることになる。これは「反定立」の立場を支える基本的な考え方の枠組みに他ならない。「反定立」の主張は「経験の類推」の提示する経験成立の論旨に基づいている。この点を踏まえたうえで、「第三アンチノミー」の「反定立」の主張をもう一度みることにしたい。そこではこの問題が次のように述べられていた。「作用の起始はつねにまだ作用していない原因の状態を前提している。そして作用の力学的な第一の起始は、この同じ原因の先行状態といかなる因果的連関ももたない状態を、つまりそれよりも前にある状態から生じたのではない状態を前提する。それゆえ超越論的自由は因果法則に反する」（KrV B 473/ A 445）。ここで批判の対象となる「作用の力学的な第一の起始」は、それが自らの「原因の状態」と何らの「因果的連関ももたない状態」を前提するものであるとすると、状態の継起のうちに空白をもたらすはずのものである。

10)「原因と結果」について説明する脈絡でカントは経験論の立場を次のように批判している。「二人［ロックとヒューム］が思いついた経験的導出はしかし、私たちがもつア・プリオリな学的認識、すなわち純粋数学と一般的自然科学が現実にあることと一致せず、したがって事実に反するだろう」（KrV B 127f.）。カントはここで経験の可能性を制約する学的認識が既に承認されていることに基づき、同様の役割を果たすものとして、またそれら以上に原理的な位置から経験の可能性を制約するものとして純粋悟性概念である「原因と結果」を考えている。そしてこの概念は、経験に先立つ位置から経験そのものの可能性を制約するものであるので、「経験」からこれを「導出」することが誤りとみなされる。

11)「諸カテゴリーは感性からは独立に、ただ悟性のうちにのみ生じる」（KrV B 144）。

そしてこの系列のうちなる空隙や空白が、不合理なものとして批判される。

「何かが起こるということ、すなわち何かが生じるということ、あるいはそれ以前には存在していなかったある状態が生じるということは、この状態を自らのうちに含まない現象が先行するのでなければ、経験的には知覚されえない。なぜなら空虚な時間に続いて起こる現実性、したがって物のいかなる状態も先行していない生成ということは、空虚な時間そのもの同様、感覚把握[12] されえないからである。それゆえ出来事のあらゆる感覚把握は、ある別の知覚に継起する知覚である」（KrV B 236f./ A 191f.）。

以上の論旨によれば、何かが生起するということについては、先行する状態とこれに後続する状態の両者が共になければ、それ自身知覚されえない。つまり後続状態だけでは「生起」ということは知覚することができない。当該事象が未だ生起していない状態と、それが生起した状態の両者の知覚されることが、「生起」ということの成立条件となる。

また、「どこにも知覚されていない」第一原因性としての自由を認めることは、「空虚な時間に続いて起こる現実性」（KrV B 237/ A 191f.）、「物のいかなる状態も先行していない生成」（KrV B 237/ A 192）を同時に認めることになるが、このような「現実性」や「生成」は「因果法則」に矛盾するので不合理なものとして否定される。そしてまた、この自由が求める「先行状態といかなる因果的連関ももたない状態」（KrV B 473/ A 445）は、経験のうちには見出すことができない。現象する事象の総体として世界を理解する限りこのような解釈は正当であり、因果法則に基づいて生成する世界のうちには、「それよりも前にある状態から生じたのではない状態」（KrV B 473/ A 445）は認めることができず、このような状態を前提に成立する自由の可能性は否定されることになる。「反定立」の論旨は一貫性をもつといえる。

Ⅰ.4.「定立」の立場

「反定立」で因果法則に矛盾するとみなされた自由概念は、「定立」ではどのように論じられているのか。定立の「証明」によれば、自由は「原因の側における」諸現象の系列がそれによって完結するような第一の原因であり、出来事の系列の端的な起始である。この起始は「反定立」にみられた「作用の力学的な第一の起始」に相当する。

「それゆえもしすべてが自然の法則に従って生起するのであれば、常にただ二次的な始まりだけがあり、決して第一の始まりは存在しない。またそれゆえ、そのどれもがより先

12)「感覚把握」の原語は „Apprehension“。

なる原因に由来する諸原因の側での系列の完全性は存在しない。ところでしかし自然の法則は、十分ア・プリオリに規定された原因なしには何事も生じない、ということのうちに成立する。したがって、あらゆる原因性はただ自然法則に従ってのみ可能であるとする命題は、無制限に一般化すると自己矛盾に陥る。それゆえ自然法則に従う原因性を唯一の原因性として受け容れることはできない」(KrV B 474/ A 446)。

ここでの論旨は以下のように要約できるだろう。それぞれの事象はそれ自身に先行する原因がなければ生起しない。ところで自然法則はただ二次的な始まりしか許容しない。二次的な始まりは常に自らに先行する原因を必要とする。従って自然法則だけでは、なぜ二次的な原因の連鎖が始まったのかを説明することができない。二次的な原因は、自らに先立つ端的で一次的な原因を前提とする。それゆえ二次的な原因は、それが存在する限り、自然法則が許容することのできない端的な第一原因を自らに先行する位置に要請する。そして、このような二次的原因の総体である世界もまた、二次的で依存的な存在者である。従って自然法則の領域は自らとは異なる仕方で存在するはずの端的な原因を自らの外部にもたねばならない。定立の証明はこのように行われている。ここでの論証の基礎には、何ものも理由なくして生起することはなく、すべては十分な理由をもって生じるという趣旨をもつ「充足根拠律」が認められる。「十分ア・プリオリに規定された原因なしには何事も生じない」ということで意味されているのは、恐らくこの根拠律である。念のため確認するならばヴォルフはこの原理を以下のように定義していた。「何ものも、それがなぜ存在しないのではなくむしろ存在するのかという充足理由なしには、存在しない」[13]。定立の証明は、基本的にこの「充足根拠律」に基づき、事象連鎖の系列の全体を一つの生起したものとみなし、これに対する充足根拠として「第一の起始」を系列の外部に求める。従ってここで論証されている「始まり」は、事象連鎖の総体を構成する系列の外部に唯一つだけ認められる世界の起始に他ならない。この点については「定立」への「註」で確認できる。

「さて私たちは、自由からの諸現象の系列の第一の始まりの必然性について、それが世界の起源を理解するために必要である限りにおいて明らかにしたのである。しかし、そこから継起するすべての状態についてはただ自然法則に従う連続であるとみなすことができる」(KrV B 476, 478/ A 448, 450)。

ここでは、世界の始まりの位置に端的な第一の原因を置くことで無限背進を否定し、系列の全体を完成させることが意図されている。このような観点はスピノザ的な決定論的世界観を否定することで自らの世界観を産み出した哲学者が共有するものである。ライプニッツは偶然的なものから成る事象連鎖の第一根拠を連鎖自身の「外部」に想定し、これを「神」と考えた[14]。ヴォルフもまた結果から原因へ向けての遡源が無限に続くことを否

13) Christian Wolff, *Philosophia prima sive Ontologia* […], Frankfurt u. Leipzig, [1]1730, [2]1736, § 70, S. 47.
14) ライプニッツは次のように述べている。「充足根拠ないし最後の根拠は、個々の偶然的なものの継起ないし継

定し、必然的存在者である「神」のうちに第一原因を認めている[15]。また講義の教科書としてカントが長年用いていたバウムガルテンの『形而上学』の「宇宙論」にも同様の世界観がみられる。「無限前進は、それがどれほど長大なものと見なされようとも、一つの偶然的なものであるだろう。したがってこの前進は自己自身に外在する作用因をもつはずである」(BM § 381, S. 206ff.)[16]。またマイアーにも同様の観点がみられる。「無限前進を自らのうちに含むはずの世界は、それにもかかわらず一つの作用因を自己の外部にもつ。この作用因は必然的なものであり、同時にまた自立的で無限なものである」(MMC § 315, S. 60)。

「定立」の証明は、それが世界の起始に唯一つだけ自由な原因を認めるものである限り、充足根拠律に基づいて世界のあり方を語る当時の講壇哲学の立場を示すものに他ならない。従ってカントが「世界の起源を理解するために必要である限りにおいて明らかにした」と語る「自由による原因性」は、それが二次的で依存的なものから成る事象連鎖の総体を考えるとき、その系列を原因の側で完結する第一原因である。そして、「そこから継起する状態についてはただ自然法則に従う連続である」(KrV B 477f./ A 449f.) と考える限り、バウムガルテンやマイアーなど先行哲学者の世界観と一致する。また、世界内に自らを見出す人間には第一原因性としての自由は認められないはずでる。ところが、この個所には以下の文が続いている。

「しかしそのことで時間のうちにひとつの系列をまったく自ら始める能力がいったん証明された（洞察されたわけではないが）のであるから、今や私たちには、世界の進行の只中で因果性に従う様々な系列を自ら始めること、また世界の諸実体に自由に行為する能力を附与することが、許されるのである」(KrV B 478/ A 450)。

ここでは始源的な活動性の能力が、先の表現に従えば「諸原因の絶対的自発性」(KrV B 474/ A 446) が、世界の起始の位置に「証明された」ことを承けて、進行を続ける事象連鎖の系列のうちなる存在者にもまた同様に認められている[17]。そしてこの存在者

起系列がどれほど際限なく続くとしても、その系列の外部にあるはずだ」(Mon. § 37, S. 42)。「したがって事物の最後の根拠は必然的な実体のうちにあるはずである［…］。そしてこの実体を私たちは神と名付ける」(Mon § 38, S. 42)。

15) ピエティスト派神学者との論争のうちにヴォルフは次のように述べていた。「私は無限前進を認めない。というのは（私はまだ神の存在とそして神が自由な決断によってこの［現にある世界を構成する事象］連鎖を決定したことを証明してはいないが）偶然的な存在者を説明するにあたって、終わりなく常に新たな根拠をもたねばならないのならば［…］出来事の連鎖において、そのものの前にはいかなる充足根拠もありえないところに、［…］すなわち最後には第一原因または神に至らねばならない。またそのことで私たちは偶然的なものの充足根拠を得る」(Kontrov S. 20f.)。

16) 世界の起源に向けての無限背進を否定するためバウムガルテンが提示した論旨については以下を参照。Baumgarten, *Metaphysica*, § 380, S. 207.

17) ここでの論証は、その形式だけをみるならば、世界の始源に複数の可能世界を想定し、そこから神が一つを選択することで現実世界が始まるとみなすことで、この世界での事象連鎖のもつ決定性を相対化し、そのことに基づいて人間に相対的な自由を認める立場と一致する。

は複数であり、事象連鎖の系列を完結するために想定された特権的な唯一の第一項とは明確に異なる。つまり、ここでは自由に行為する能力が世界の進行のうちなるそれぞれの人間のもとに置かれており、その点で人間の行為に先行的決定根拠からの独立を認めないドイツ講壇哲学、ならびに『新解明』（ND 1755）でのカント自身の立場とは異なる。また、ここでは「時間のうちに」「系列をまったく自ら始める能力」が認められているが、批判期の観点からは「時間のうちに」第一原因性ないし絶対的自発性は認められないので、ここでの記述がカント自身の立場を示すものではないことが分かる。第一原因性は、時間的な拡がりの領域を認識主観との関係性のうちにのみ成立するものとして相対化する観点から、「時間のうちに」ではなく、時間的な制約を受けないところに想定される。

ここでまた、「定立」と「反定立」それぞれの立場で世界概念の異なっていることが指摘できる。「定立」は世界の「外部」を承認し、そしてまさにこの「外部」に位置する原因に、先ず自由を認めている。「定立」は、原因へ向けての事象連鎖の系列の背進がどれほど長く続くとしても、その系列の外部に第一原因を置くことで、背進を完結しようとする立場である。これに対して「反定立」は、世界を事象連鎖の全体とみなし、その外部には何ものも認めない。つまり、事象連鎖の系列の総体として世界をあくまで一元的なものとみなす。換言すれば、「反定立」は自らに外在するいかなるものも認めない全体として世界を考え、そこに生成する事象のすべてを先行する決定根拠によって制約されたものとみなし、第一原因へ向けての事象連鎖の系列を無限背進とみなす立場である。したがって「反定立」は、無限背進を一元的な世界のうちに認める立場である。

Ⅰ.5.「力学的アンチノミー」の根底にある神の宇宙論的証明

必然的存在者をめぐる「第四アンチノミー」[18] は、様々な観点からみて第三アンチノミーと共通点をもつといえる。先ずこれら二つのアンチノミーの「定立」の基層には、神の宇宙論的証明の枠組みが認められる。この証明によれば、偶然的で依存的な事象の総体である世界はそれ自身偶然的で依存的であるので、自らの外部に充足根拠をもつという考え方である。この充足根拠はまた、絶対的な第一の起始であり、同じく絶対的に必然的な存在者であり、それが無制約者という理念のうちに結合する。70年代後半のものとされる形而上学講義録に、神の宇宙論的証明を再現する以下のような記述がみられる[19]。

18)「第四アンチノミー」は次のような内容をもつ。定立：「世界の部分としてかまたは世界の原因として、端的に必然的な存在者である何かが、世界に帰属している」（KrV B 480/ A 452）。反定立：「端的に必然的な存在者というようなものは、世界のうちにも、世界の外にも、世界の原因としてはどこにも現実存在しない」（KrV B 481/ A 453）。

19) 70年代後半の講義の筆記録とされる以下の文からも、第三、第四アンチノミーが共通の基盤をもつことが理解できる。「［…］無限の量というものはありえない。原因の系列の無限性から無限性を洞察することはできないし、またこのことから私たちは第一原因を推論することもできない。そうではなく、偶然的なものから［第一原因を］推論するのである。というのも偶然的なものは、必然的で完全であるはずの一つの原因をもつからである。したがって諸原因から成る系列はその根底に第一原因をもつ」（MPöl A 86/ AA XXVIII. 1, 198）。

「どの物体も偶然的に動いている。それら物体は自らを動かす原因をもたねばならない。もし運動の諸原因へと遡源するならば、その本性からして物体とは異なる第一の起動者にまで至らねばならない。第一の起動者はしかし、自由な存在者である。第一の運動は自由な選択意志の内的な原理から発源するはずである。それゆえ世界は第一原因だけではなく、自由によって作用する原因をも証明する。この自由という述語は心理学から借用されている。私たちはしかしまた超越論的自由を、内的原理から働く絶対的自発性として考えることができる。自由をもった最上原因はしかし単なる原因ではなく、同時にまた創始者でもある。それゆえ私たちは宇宙論的証明によって、偶然的なものから必然的なものを、自由による原因を推論することができる」（MPöl A 286/ AA XXVIII. 1, 315f.）[20]。

ここにみられる「第一の起動者」は第三アンチノミー定立への註に再びみられ、自らに先行する決定根拠をもたないもの、従って自由な存在者を意味する[21]。また「創始者」は、第四アンチノミーが主題化する自己原因的な必然的存在者に対応する。そして最後の文には、第三ならびに第四アンチノミーで行われる推論の基本構造が、神の宇宙論的証明に基づくことが示されている[22]。この引用文から、自由と必然的な存在者が、神の存在を論証する宇宙論的証明のうちに緊密に結びついていることが改めて確認できる[23]。

Ⅱ．超越論的観念論

二律背反の問題を解決するための「鍵」となる観点をカントは「超越論的観念論」（KrV B 518/ A 490）と名付け、この新たな観点から空間と時間ならびにそのうちに現れる一切の事象に、一方で改めて経験的な実在性を認めている。しかし他方で現象を自体的存在と区別することに基づき、それらは決して認識主観の働きから独立に自存するもので

20）この箇所でカントは宇宙論的証明について、それが「自然な理性に適合」すると語っている。「偶然的な諸事物の現存在から一つの必然的原因を推理する宇宙論的証明は、自然な理性に適合している。またこれは古代の人々が用いた証明であり、第一動者からとられた証明と彼らが名付けたものである」（MPöl A 286/ AA XXVIII. 1, 315）。

21）「（エピクロス学派を除き）古代のすべての哲学者は、世界の諸々の運動を説明するために第一動者を、すなわち諸状態の系列を最初に自ら始めた自由に働く原因を、想定せざるを得ないと考えた」（KrV B 478/ A 450）。

22）次のメモ書き遺稿では第三、第四アンチノミーの主題が共に「力学的理性の原理」と見なされている。「（世界の内なる）自由と、世界に外在する自由な最上原因の絶対的必然性は、力学的理性［の］原理である」（Refl. 5363, S. XVIII 162; *v* 1776–78）。

23）この点については既に指摘されている。以下を参照。H. Heimsoeth, Zum kosomologischen Ursprung der Kantischen Freiheitsantinomie, in: ders., *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II*（*Kant-Studien Ergänzungshefte Nr. 100*）Bonn 1970. また空間・時間に関する第一アンチノミー、物質の分割に関する第二アンチノミーは系列を構成するそれぞれの項がいずれも「同種的」であり、数学的総合をなすとみなされ、定立ならびに反的立の主張が共にカント固有の観念論の立場から誤りとされる。これに対して第三、第四アンチノミーは共に、系列を構成する諸項のうちに異種性が認められ、力学的な「異種的」総合をなすとみなされることで、矛盾する双方の主張が同じ観念論の立場から「真でありうる」（KrV B 560/ A 532）とされる。以下を参照。KrV B 556ff./ A 528ff.

はないとみなす。この点についてカントは以下のように述べている。

「空間ないし時間のうちに直観されるすべてのもの、従って私たちに可能な経験のあらゆる対象は、現象すなわち表象に他ならない。つまりそのものは、それが表象されるように、延長する存在者として、ないしは諸変化の諸系列として、私たちの思考の外にあってそれ自体として根拠をもつ現実存在ではない」（KrV B 518f./ A 490f.）。

ここでの「諸変化の諸系列」という表現は、先にみた「経験の類推」での「あらゆる変化は原因と結果の結合の法則によって生じる」（KrV B 232/ A 189）という原則に対応している。世界を構成するのは諸々の事象の変化ならびにその系列であり、それは因果法則に従って生起するものに他ならない。事象のあらゆる変化はまた同時に「表象」であり、「私たちの思考の外にあってそれ自体として」存在するものではない。それらはあくまでも私たちの思考、すなわち「私は考える」という意識の働きのうちなる存在者であり、そこにおいてのみ実在性をもつ。この点についてカントは「現象の超越論的観念性」（B 534/ A 506）とみなし、そしてこのような理論構成の枠組みを「超越論的観念論」（B 518/ A 490）と名付けたわけである。この観念論の立場からみるならば、感官の対象は経験的には確かに実在するものであるが[24]、しかしこれは認識主観が自身の能力に即してこれを表象する限りでのみ実在するものである。そして、この認識能力を私たちに固有のものとして相対化する観点からみるならば、現象する世界はあくまでも私たちの認識能力に相即的なものであることになる。

また世界の「無限前進」ないし「無限背進」というテーマに直接関わる脈絡で、この観点は以下のように述べられている。

「［…］世界は決してそれ自体で（私の諸々の表象の背進的系列から独立に）現存在しているものではないので、世界はそれ自体無限なものとして現存在しているのでも、それ自体有限なものとして現存在しているのでもない。世界は、ただ諸現象の系列の経験的な背進のうちにだけあるのであって、それ自体としては決して見出すことができない」（KrV B 533/ A 505）。

眼前に広がるこの世界は現象としての世界であり、これは私たちが対象を表象しようとする限りで現われるものであって、認識主観にとっての表象であることを離れて何ものかとして存在するものではなく、自らだけで存在するものではない。換言すれば、現象の総体である世界は、認識主観の表象作用から独立に存在するものではなく、この認識主観が

24）この点についてカントは、空間、時間ならびに事象の「経験的実在性」（KrV B 44/ A 28; B 52/ A 35）と名付ける。

表象する活動領域を拡張することで次第に拓かれるものであり、それ以外の仕方で認識できるものではない。同様のことが、以下のようにも述べられている。

「もし世界がそれ自体として現実存在する全体であるならば、世界は有限であるか無限でるか、いずれかである。ところで（一方で先に行った反定立の論証により、また他方では定立の論証により）有限であるというのも無限であるというのも、どちらも偽である。それゆえ、世界（あらゆる現象の総括）がそれ自体として現実存在するというのも偽である。そこから、現象は一般に私たちの表象の外では無であるということが帰結する。このことこそ私たちが現象の超越論的観念性によって述べようとしたことであった」(KrV B 534f./ A 506f.)。

ここには、二律背反する従来の世界観を否定し、両者の間に認められる矛盾を解決する視点が素描されている。無限背進を肯定するスピノザの一元論的世界観がここで最終的に否定されるとともに、これに反対して執拗に継承されたもう一つの世界観、すなわち背進の総体に外部を認め、そこに背進の総体としての世界の根拠を認める世界観もまた、同様に最終的に否定される。世界は無限背進を内に含むそれ自身独立した事象の総体ではなく、また自己の外部にある第一原因とともにその背進を終える事象の総体でもない。世界はただ現象するものの総体であるに止まり、現象はそれ自体として現実存在するものではなく、したがって世界もまたそれ自体で、すなわち認識主観との関係性を離れたところで、現実存在するものではない。これが、無限背進の問題を最終的に解決する新たな観点である。

この観点から、現象する世界と同時にそれ自身現象でないもの、空間と時間の制約を受けず、私たちに固有の認識の道具立てでは把握することのできないものを想定することが求められることになる。カントによれば、「現象はそれ自身いかなるものでもないので、超越論的対象がその根底にあるはずである。この超越論的対象が現象を単なる表象として規定している」(KrV B 566/ A 538)。現象はそれが現象である限り、何ものかの現象である。換言すれば現象はそれ自身現象ではない何ものかの現われであって、現象するものがある限り常にそれ自身現われることのないものが同時に想定されることになる。ここでは現象のもとにあってそれ自身現われることのないものが「超越論的対象」と名付けられている。以上は認識の成立する脈絡への反省のうちに現れる客観一般に対する解釈である。

Ⅲ．宇宙論的懐疑の帰趨

既に触れたようにドイツ講壇哲学では、事象連鎖の系列の起源へ向けてなされる「無限

背進」の問題が、世界のあり方に関わる主要な問題の一つとして繰り返し主題化されていた。カントはこの問題について先にみた現象と物自体を区別する観点から独自の解答を与えている。事象連鎖の系列の総体としての世界は、自らのうちに系列の無限背進を包摂しているのか、それとも系列自身は無限に背進するとしても系列の外部の第一原因とともに背進は完了するのかという問いは、カントによれば事象連鎖としての世界を自体的存在とみなす誤った前提のもとに立てられたものに他ならない。そして、無限背進の問題は次の推論に基づく。

「条件付けられたものが与えられているならば、条件付けられたもののすべての条件の全系列もまた与えられている。さて、私たちには感官の諸対象が条件付けられたものとして与えられている。したがって［条件付けられたもののすべての条件の全系列もまた与えられている］」（KrV B 525/ A 497）。

カントによれば純粋理性の二律背反はすべてこの「弁証的論証」（ibid.）に起因する。ここでの推論の「大前提」にあたる第一文にみられる「条件付けられたもの」は感官の対象という限定を受けておらず、したがって現象としての対象に制限されるものではなく、対象一般を意味する。すなわち私たちの認識能力から独立するものを含むものとして、ここでは「条件付けられたもの」が考えられている。これに対して「小前提」での「条件付けられたもの」はここに明記されているように「感官の対象」である。そして二つの「前提」にみられる「条件付けられたもの」の内実が異なるこの推論は「媒概念多義の誤謬」（KrV B 528/ A 499）を犯しているとみなされ、次のように説明される。「宇宙論的理性推理の大前提は、純粋カテゴリーの超越論的意味で条件づけられたものを理解しており、これに対して小前提は単に現象へと応用された悟性概念という経験的な意味で、条件付けられたものを理解している」（KrV B 527/ A 499）。「小前提」は私たちの感官の対象だけを問題としており、それはあくまでも経験のうちに見出される対象である。これに対して「大前提」では、「私たちの思考の外にあってそれ自体として根拠をもつ現実存在」（KrV B 519/ A 491）が、条件付けられたものとみなされている。そして、それが自らの条件への遡源の系列を構成するものとして考えられている。「純粋カテゴリーの超越論的な意味」で条件づけられたものとは、「原因性と依存性」（KrV B 106/ A 80）という純粋カテゴリーを、感官の対象という制約を考慮することなく適用するとき現れるはずの「条件づけられたもの」である。

ここでカントが批判するのは、バウムガルテンやマイアーなど先行哲学者が宇宙論で提示した無限背進に関するテーゼ[25]である。彼らは媒概念多義の誤謬のもとに推論を行い、

25）バウムガルテンは次のように述べている。「無限前進は、それがどれほど長大なものとみなされようとも、一つの偶然的なものであるだろう。したがってこの前進は自己自身に外在する作用因をもつはずである」

感官の対象が経験的に実在することから、感官の能力の限界を超えたところに第一原因の実在することを論証しようとしていたわけである。私たちの感官の対象と、この感官から独立に存在するはずのものを区別するという観点をもたない限り、ここでのアンチノミーの問題は決して解決することができない。換言すれば、現象する事象の経験的実在性を認めつつ、その独立自存性を認めない観点からのみ、二律背反の問題を解決する可能性が拓ける。

また、事象の総体としての世界の有限性ならびに無限性　－これが「宇宙論的自己矛盾」（KrV B 525/ A 497）である－　が次の箇所では直接主題化されている。ここに、18世紀ドイツ講壇哲学の脈絡で繰り返し論じられた、世界を構成する事象連鎖の無限背進についてのカントの明確な解答を読み取ることができる。

「もし、世界はその量に関して無限である、世界はその量に関して有限である、という二つの命題を互いに矛盾対等であるとみなすならば、世界（諸現象の全系列）は物自体であるということを私たちは承認しているのである。というのも、私が世界の諸現象の系列における無限の背進を否定するにせよ、またその有限な背進を否定するにせよ、世界はそのままあり続けるからである。しかし、もし私がこの前提を、ないしはこの超越論的仮象を取り去るならば、そして世界が一つの物自体そのものであることを否認するならば、二つの主張の矛盾対等関係[26]にある争いは、単なる弁証的対等へと変貌する。そして世界は決して（私のもつ諸表象の背進的系列から独立に）それ自身で現実存在しているものではないのだから、世界はそれ自体無限な全体としても、それ自体有限な全体としても、現実存在するものではない。世界は、ただ諸現象の系列の経験的な背進のうちにあるものであって、それ自身としては決して見出すことができない。したがって、もしこの背進が常に条件づけられているとするならば、世界は決して全体として与えられておらず、それゆえ世界はいかなる無条件的な全体でもなく、またそのようなものとして、無限の量をもつものでも、有限な量をもつものでもない」（KrV B 532f./ A 504f.）。

ここでは現象を物自体から区別するという超越論的観念論の観点から、世界がそれ自体として存在するものではなく、したがって一つの全体として一定の量をもつものでもないという判断に基づき、矛盾する命題に解答が与えられている。そして、物自体については認識の対象ではないので、一定の量をもつのかどうかという問いを立てること自体が否定

（BM § 381, S. 206ff.）。マイアーの「宇宙論」には次のような記述がみられる。「無限背進を自らのうちに含むはずの世界は、それにもかかわらず一つの作用因を自己の外部にもつ。この作用因は必然的なものであり、同時にまた自立的で無限なものである」（MMC § 315, S. 60）。

26）矛盾対等関係にある二つの命題では、一方の偽であることが証明されることで他方の真であることが証明される。これに対して弁証的対等関係では、「一方の判断は他方の判断とただ矛盾するだけでなく、矛盾するために求められていることより以上のことを述べている」（KrV B 532/ A 504）ので、「両者ともに偽でありうる」（ibid.）。

される。換言すれば、現象するものと物自体とを区別し、私たちの認識する事象連鎖の総体としての世界を現象界とみなし、そこに自体的な一定の量を認めず、あくまでも認識主観の表象するものに止まるという観点から、二律背反する世界観相互の争いに決着がつけられている。自体的に存在するものとのアナロジーにおいて考察される現象界については、それ自身が独立自存するものとして特定の量をもつものではないというのが、ここでの結論である。

文献表

Baumgarten, Alexander Gottlieb: *Metaphysica* (BM), Halle [4]1757, [1]1739, lat. u. dt. übers. von G. Gawlick u. L. Kreimendahl, Stuttgart-Bad Cannstatt 2011.

Feder, Johann Georg Heinrich: *Logik und Metaphysik* (LuM), Göttingen [3]1771,[1]1769.

Heimsoeth, Heinz: Zum kosmologischen Ursprung der Kantischen Freiheitsantinomie, in: ders., *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II (Kant-Studien Ergänzungshefte Nr. 100)* Bonn 1970.

Kant, Immanuel.: *Immanuel Kants Vorlesungen über die Metaphysik...* (MPöl), hrsg. von K. H. Pölitz, Erfurt 1821, Neudruck, Darmstadt 1988.

Ders.: *Kants Gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenchaften (und ihren Nachfolgern) (AA), Berlin 1900ff.

Ders.: *Kritik der reinen Vernunft* (KrV), Riga [2]1787 (B), [1]1781 (A), in: W. Weischedel, hrsg., *Immanuel Kant Werke in sechs Bänden*, Bd. 2, Darmstadt 1956.

Ders.: *Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio* (ND), Königsberg 1755, in: Weischedel, ibid., Bd.1., Darmstadt 1960.

Ders.: *Reflexionen zur Metaphysik* (Refl.), in: AA Bd. 18, Berlin u. Leipzig 1928.

Leibniz, Gottfried Wilhelm: *Essais de theodcée...* (Theod.), Amsterdam 1710, in: *Leibniz, Philosophische Schriften*, Französisch-Deutsch, Bd. 2.2 hrsg. u. übers. von Herbert Herring, Frankfurt a.M., 1996.

Ders.: *Monadologie* (Mon), übers. von A. Buchenau hrsg. von H. Herring, Hamburg [2]1982, [1]1956.

Meier, Georg Friedrich: *Metaphysik. Zweiter Theil, Cosmologie* (MMC), Halle [2]1765, [1]1756, Neudruck, Hildesheim u.a. 2007.

Willaschek, Marcus u.a. hrsg., *Kant-Lexikon, Studienausgabe*, Berlin 2017.

Wolff, Christian: *Der Herrn Doct. u. Prof. Langens oder Der Theologische Fakultaet zu Halle. Anmerkungen über des Herrn Hoff-Rats u. Prof. Christian Wolffens Metaphysicum...* (Kontrov), Cassel 1724, in: *Christian Wolff, Gesammelte Werke* (GW), I. Abt., Bd. 17, Hildesheim 1980.

Ders.: *Philosophia prima sive Ontologia ...*, Frankfurt u. Leipzig [2]1736, [1]1730, in: *Wolff GW* II. Abt., Bd. 3, Hildesheim 2011.

Ders.: *Psychologia empirica ...* (PE), Frankfurt u. Leipzig [2]1738 , [1]1732 , in: *Wolff GW* II. Abt., Bd. 5 , Hildesheim 1968.

Ders.: *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen ...* (DM), Halle[11]1751, [1]1719, in: *Wolff GW* I. Abt., Bd. 2, Hildesheim u.a. 1983.

„Dynamische Antinomie“ in der *Kritik der reinen Vernunft*

Katsutoshi KAWAMURA

In der dritten und vierten – d. h. dynamischen – Antinomie in der *Kritik der reinen Vernunft* hat Kant sich nicht nur mit den Problemen der Freiheit und des notwendigen Wesens, wie im Text erklärt, beschäftigt, sondern auch mit dem Problem der Unendlichkeit des Regressus der Reihe der Weltgeschehnisse, mit dem sich bereits die Philosophen der deutschen Schulphilosophie des 18. Jahrhunerts beschäftigten. Die Philosophen der Wolff-Schule z. B. waren im allgemeinen der Ansicht, dass die Welt, die aus den Reihen der Geschehnisse besteht und selbst als Ganzes Geschehnis und Zufälliges ist, ausser sich eine erste Ursache und einen zureichenden Grund haben soll. Sie setzen diese erste Ursache und diesen zureichenden Grund mit dem Urheber der Welt gleich.

Die Denkweise dieser Philosophen gründet sich auf dem folgenden Vernunftschluss: Wenn das Bedingte gegeben ist, so ist auch die ganze Reihe aller Bedingungen desselben gegeben; nun sind uns Gegenstände der Sinne als bedingt gegeben, folglich ist die ganze Reihe aller Bedingungen gegeben. Nach diesem Schluss muss man die ganze Reihe der Weltgeschehnisse als Gegebenes verstehen, und folglich muss die Reihe der Weltgeschehnisse als Ganzes entweder unendlich oder endlich existieren. Jedoch, in diesem Vernunftschluss sieht Kant einen entscheidenden Fehler. Nach Ansicht Kants ist das Bedingte in dem Obersatz das an sich Seiende, während das Bedingte im Untersatz nicht das an sich Seiende sondern bloß Gegenstand unseres Sinnes ist. Weil das Bedingte im Obersatz und im Untersatz unter sich unterschiedlichen Inhalt subsumieren, hält Kant diesen Schluss für einen Trugschluss.

Das Problem der Unendlichkeit der Reihe der Weltgeschehnisse hat Kant in der Form versucht zu lösen, die Gegenstände unseres Sinnes nicht für das an sich Seiende zu halten, sondern für Erscheinungen, die erst durch die Beziehung zum Erkenntnissubjekt zustande kommen, und nicht unabhängig von dieser Beziehung existieren. M.a.W., auf Grund der Unterscheidung der Dinge an sich von den Erscheinungen hat Kant versucht dieses Problem zu lösen. Die Welt, die uns erscheint,

ist nicht das an sich Seiende sondern Erscheinung, und hat folglich keine bestimmte Größe. Was die Dinge an sich angeht, so haben wir keinen Zugang, ihre Größe zu messen, und folglich kann man die Frage nach ihrer Größe nicht stellen. Diesen Gesichtspunkt nennt Kant den transzendentalen Idealismus.

In der vorliegenden Abhandlung beschäftige ich mich zunächst mit dem Problem des Widerspruchs zwischen der Freiheit als erster Kausalität und dem Gesetz der Kausalität, dessen Auflösung Kant auf seine Ansicht des transzendentalen Idealismus gründet. Und dann versuche ich zu erklären, was der transzendentale Idealismus ist. Zum Schluss prüfe ich nach, wie Kant die Probleme des Regressus der Weltgeschehnisse in infinitum unter dem Gesichtspunkt des tranzendentalen Idealismus zu lösen versucht.